平成９年度厚生省心身障害研究

「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

「メディア情報が若年者のリプロダクティブヘルスに及ぼす影響」

（分担研究：女性のリプロダクティブヘルスに関する研究）

分担研究報告書

分担研究者　北村　邦夫[1)]

研究協力者　村松　泰子[2)]

佐藤（佐久間）りか[3)]

斎藤　文栄[4)]

平野　亜矢[5)]

要約

近年活発化の動きを見せている思春期の少女たちの性行動と、彼女たちをターゲットとしているマスメディアにおける性情報との関係性を、リプロダクティブヘルスの視点から捉え直し、少女向け雑誌の内容分析を中心に、その国際比較および時系列比較、ならびにフォーカス・グループ・インタビューを通して、既存の雑誌における性情報の偏りを明らかにし、少女たちの身体的・精神的健康の向上に貢献するような情報発信の可能性を検討した。

分析の結果、性情報を売り物にする少女誌は 1980 年代初頭より存在しており、当時に比べて性情報の量や内容の露骨さに大きな変化は見られないことから、近年の少女たちの性行動の活発化が直接少女誌の性情報によってもたらされたとは考えにくいと結論された。但し、目につく質的な変化として、性情報の発信主体が読者自身に移ってきていること、さらに読者投稿の内容のポルノ化が進んでいることの２点が挙げられた。また、アメリカにおける少女誌との比較では、日本の少女誌の性情報は男性ポルノ誌のコピー的な情報に偏っており、性的自己決定権や避妊・性病予防などの自己身体管理にかかわる情報が大きく不足していることが明らかになった。

一方、グループ・インタビューでは、少女たちが日常的に成人男性による性的誘惑にさらされている実態が明らかになり、93年以降の大人向けの雑誌における「女子高生」を

１）（社）日本家族計画協会クリニック
２）東京学芸大学教育学部
３）プリンストン大学社会学科
４）女性と健康ネットワーク
５）上智大学新聞学科

キーワードとした記事件数の爆発的な増加を考えても、「女子高生」を商品化するメディアの情報が成人男性の少女たちに対する態度に及ぼす影響の方が懸念される。こうした社会環境の変化に対応するために、少女たちに積極的にリプロダクティブヘルス／ライツに関する対抗情報を与えて、巷に氾濫している性情報に対する批判的な視座を育成していくことを提言したい。

見出し語：十代の性、少女雑誌、リプロダクティブヘルス、リプロダクティブライツ

研究目的

近年、大人向けのマスコミでブルセラ、援助交際などが取り沙汰される中、急速に思春期の少女たちの性行動が活発化しており、こうした変化が若年層のリプロダクティブヘルスに与える影響が懸念され始めている（例えば、90 年代に入って高校３年女子の性体験率が急速に伸び、同年齢の男子のそれを超えたことが複数の調査で明らかになっている）[1~2]。こうした風潮の台頭を論ずる際、マスメディアの情報にその原因を求める声をしばしば耳にするが、近年のメディア研究においては、メディア情報の利用者の取捨選択能力、さらには収集した情報に意味を付与する能力に注目が集まっている。つまり、人間はメディア情報によってプログラミングされる自動人形ではなく、メディアが提示する情報を自分なりに選択し読み解いて意味を作り上げるとする考え方である。但し、その読み解き方は、その人の社会的条件により左右されるし、また、提示されるメディア情報の選択肢の幅によって制約を受ける。すなわち、思春期の若者の性行動の変化とマスメディアにおける性情報の関係性を考える際には、若者たちの情報ハンドリング能力とメディアが提供する情報の幅が重要な鍵となる。

また、従来からマスメディアの性情報については、青少年保護育成条例の有害図書規制にも見られるように、基本的に青少年にとって「有害」なものとみなされてきた。しかし、性はあくまでも人間の心身発達過程の一部であり、女性のリプロダクティブヘルスの維持にとってもきわめて重要な一要素である。性に関する情報は個々人の健康に、さらには女性の人権に直接関与するものであり、嫌らしいもの、恥ずかしいものとして隠蔽されるべきではない。よって、少女向けの性情報を先験的に有害なものとみなすことなく、女性のリプロダクティブヘルスおよびライツにかかわる情報の一部として捉え直し、それが今日の少女たちの行動の変化にどのように影響し、あるいは対応しているのかということを検討する必要がある。

本研究では上記の２点を踏まえ、メディア利用者の主体性を考慮した分析手法にもとづき、今日の少女雑誌における性情報の偏りを明らかにしつつ、読者がより自由に情報を選択できるような情報発信の可能性を検討していく。

研究方法

これまでにも少女雑誌にかんする分析研究はいくつかなされている[3~4]が、それらの研究成果を踏まえ、本研究でつけ加えるべき視点を以下のようにピックアップした。

① 歴史的視座～先行研究の多くはある１時点での雑誌内容の共時的分析に留まっているため、雑誌の情報が実際の少女たちの行動に変化をもたらしたかどうかが明らかにできない。少女メディアの年表作りなどを通して、歴史的な視座を持たせる必要がある。

② 比較文化的視座～先行研究では既存雑誌が抱える問題点の洗い出しはなされているが、オルタナティブとなる情報のあり方が具体的に提示されていない。海外雑誌との比較を通じて、ありうべき情報、不足している情報などの洗い出しを行いたい。

③　最新のストリート系雑誌に関する考察～先行研究には 94 年以降に登場した『東京ストリートニュース』『Cawaii』『egg』などのコギャル系雑誌に関する分析は含まれていない。特にそのカタログ性、読者参加の形態、男性読者の存在、出版社の性格についての検討が必要である。

④　読者側の視点の取り込み～先行研究では「研究者の読み」が前面に出され、実際に少女読者がそれらの記事をどのように読んでいるかについての検証がなされない傾向がみられた。本研究では読者の雑誌閲読の実態、および記事内容についての考え方などを調査し、研究者側の読みと突き合わせる努力をしたい。

上記の4点を踏まえ、以下のような調査方法を用いることにした。

（1）　フォーカス・グループ・インタビューによる調査～雑誌の内容分析の際に読者の生の声を反映させることを目的に、内容分析に先がけて8月末から9月にかけて都内私立女子高校2校の生徒たち（4人組と2人組）に対し、グループ・インタビューを行なった。具体的には①研究者が持参した19誌の少女雑誌（コミック誌、芸能誌除く）のなかから読んだことのあるものを選んでもらって、自分たちの判断で大まかに分類してもらう、②どんなときに読むか、買って読むか、いつ頃読んだか、雑誌の情報をどの程度信用するかなど雑誌にかんする質問をする、③性にかんする意識・知識をケースディスカッションの形式で確認する、という3項目を実施した。

（2）　少女雑誌の内容分析～①インタビューの際に女子高生たちに分類してもらった少女雑誌の中から、特徴的な3タイプ（一般総合雑誌・H系雑誌・コギャル系雑誌）9誌を取り上げ、97年9月号・10月号2ヵ月分の内容分析を行なった。それぞれの雑誌にどのような性情報が載っているか、そうした性情報は思春期の少女たちにどのように使われていると考えられるか、といったことに加え、これらの雑誌が少女たちのネットワーキングのツールとしてどのように機能しているかを検討する。ここでの目的は、少女たちが実際にどのような性情報に接しているかを探ることにあるのではなく、思春期の少女をターゲットとした性情報のあり方を考えることにあるので、実際に少女たちが読んでいる、女子大生以上をターゲットにした雑誌（例えば『JJ』『CanCam』などのファッション誌や女性週刊誌）は対象から除外する。②1980年代前半に性情報の過激さが話題を呼んだ少女誌について、同様の内容分析を行い、量的あるいは質的にどのように変化しているかを検討する。③今日のアメリカの代表的な少女雑誌に対して同様の内容分析を行い、日本の雑誌との違いを明らかにすると同時に、日本における今後の性情報提供の方向性を探る。

（3）　少女をめぐるメディアに関する年表作り～少女をめぐるメディアの動向をある程度長期にわたって把握するために、1980年まで溯って、①少女雑誌の創刊・廃刊の動きを追い、②雑誌以外のメディアでの動き、③同時期の社会の動き、④さらには少女たちをめぐる大人向けメディアにおける報道にも目を向け、少女たちに対するマスコミの影響だけでなく、大人の（特に成人男性）に対するマスコミの影響についても検討する。④については「大宅壮一文庫索引総目録」における「少女売春」「高校生」をキーワードにした記事件数の推移を参考にする。

研究結果

I. 少女雑誌内容分析

インタビューの際の、女子高生たち自身の分類方法に沿って、「一般総合雑誌」「H系雑誌」「コギャル系雑誌」の三つのタイプの雑誌について、それぞれの代表的なタイトルを取り上げ、内容の分析を行なった。一般総合雑誌の分野では『セブンティーン』『プチセ

ブン』を、H 系雑誌では『エルティーン』『おちゃっぴー』『パステルティーン』を、コギャル系雑誌では『東京ストリートニュース』『egg』『Cawaii』『SNAP×2』を代表的なものとして取り上げた。(ちなみに『おちゃっぴー』は 10·11 月合併号で、この号をもって休刊。) これら少女雑誌の出版社、創刊年、発行部数などについては表1を参照。内容分析の対象となったのは、月刊誌については 97 年 9 月号と 10 月号の 2 ヶ月分で、隔週刊の雑誌については同じ月の最初の号を分析した。隔月刊の雑誌については 8 月末時点で出ていたものとその次の号を分析した。

本研究においては、性情報をリプロダクティブヘルスの枠組みで捉えているので、既存研究では性関連記事の一部として取り上げられてきた、恋愛や男の子に関する話題は、身体的接触についての情報を伴わないものについては分析の対象からはずした。但し、これは必ずしも恋愛などの精神的な側面がリプロダクティブヘルスと無関係であるということを意味するものではない。既成の「少女」概念の枠組みでは、精神性に重点が置かれすぎ、恋愛の身体的側面が軽視されてきた傾向があると思われることから、ここでは敢えて身体情報に限って分析を行なうものである。

表 1 内容分析を行なった少女誌一覧

タイトル(出版社)	創刊年	発行頻度、発行部数
<一般総合誌>		
プチセブン(小学館)	77 年	隔週刊、公称 70 万部
セブンティーン(集英社)	68 年	隔週刊、公称 37.3 万部
<H系雑誌>		
エルティーン(近代映画社)	82 年	月刊、公称 35 万部
おちゃっぴー(マガジン・マガジン)	86 年	89 年より月刊、公称 20 万部
パステルティーン(笠倉出版社)	91 年	月刊、公称 15 万部
<コギャル系ストリート誌>		
Cawaii(主婦の友社)	96 年	月刊、公称 30 万部
egg(ミリオン出版)	95 年	月刊、公称 40 万部
東京ストリートニュース(学習研究社)	94 年	隔月刊、公称 15 万部
SNAP×2(辰巳出版)	97 年	不定期刊

出典:メディア・リサーチ・センター『雑誌新聞総かたろぐ 97年版』

さらにここでは、量的分析よりも質的分析に力点をおいているので、量的計測については基礎データとしての各誌の性情報関連記事が全体ページに占める割合の算出のみに絞った。その際、カウントは1ページを単位とし、1ページ未満の短いコラムでも1ページとしてカウントした。性情報関連記事の見出しページもカウントに含め、企画そのものが性情報伝達を目的としていない場合(漫画や物語など)は、性描写のあるページ数のみをカウントして、全ページ数に対する割合を算出した。

● 一般総合誌

内容は比較的大人しく、身体の悩み相談室のような身体・健康関連情報もほとんどない。性情報が占めるページ数は全体の5%に満たない。特に『セブンティーン』は保守的であり、やや開放的な『プチセブン』でもかなり覗き見的な記事が多く、正面から性の問題について取り組む姿勢は見られない。ちなみに、『セブンティーン』については 1987 年から 88 年にかけて1年間の記事内容を分析した既存研究[5]があるが、そのデータと比較すると、この 10 年間に性関連情報がかなり減少していることが分かる。当時の『セブンティーン』には中絶や避妊についての記事、読者のC体験談など、かなり性に対して踏み込んだ記事が掲載されている。

<考察>本来はもっとこれらティーンズ総合誌(発行部数も多く、幅広い層に読まれている)がセックスやリプロダクティブヘルスを真面目にとりあげるべきではないだろうか。この世代の少女たちは『a n・a n』『n o n n o』と言った上の年齢層を狙った女性誌も読んでいるが、ティーンズにとってのセックスの意味は大人のそれとは違う。ティーンズ向けの総合誌では恋愛がらみの記事は非常に多いが、それと性情報がうまく結合されていない。セックスを恋愛の中にどのように位置づけるかを考えることが必要である。

97年の一般総合誌における性関連記事の例

	9月号	10月号
セブンティーン	特になし <性関連記事の全体ページに占める割合 0%>	・「男のコのキス体験率、98%ってホント!?」(7p) <性関連記事の全体ページに占める割合 4.4%>
プチセブン	・「ワオみちゃったー ラブホに残されたあんな物こんな物 えー！そんな物」(3p) ・「ワタシとカレのHのマナー」(2p) <性関連記事の全体ページに占める割合 2.3%>	・「先生を困らせちゃった質問」という記事(3p)のなかに一部性関連の質問が入っている <性関連記事の全体ページに占める割合 1.1%>

● H系雑誌

これらの雑誌では全体の15～50%のページが性関連情報である。3誌に共通する特徴は、先行研究でも論じられているように読者投稿に支えられていることである。これらの雑誌では投稿用紙が各号に挟み込まれており、投稿が採用された場合には2～3000円程度の原稿料がもらえることになっている。『エルティーン』『おちゃっぴー』の各編集部に確認したところ、読者欄の投稿はヤラセではなく、すべて読者から送られたもので、字句の間違いの訂正や若干の長さの調整以外はそのまま掲載しているという。(但し、特集記事では投稿に多少の脚色を加えることもある。)

これらの投稿の多くは<悩み告白>と<エロティック・フィクション>の二つに大別できる。悩み告白には性行為には触れない投稿もあり(シンナー中毒、プラトニックな恋愛、三角関係、いじめなど)、また中絶、レイプなどネガティブな性体験を告白するものも多く、あきらかにエロティックな投稿と一線を画している。一方、<エロティック・フィクション>、すなわち告白調ではあるがおそらくフィクショナルなポルノ的な投稿は、捉え方が難しい。確かに一種の自己表現といえなくもないが、義父との近親姦、集団レイプ、電車内で痴漢に犯される、などの状況で性の悦びに目覚める、という陳腐な設定が多く、その性描写が男性誌のコピーそのままであまりにも貧しい(女性一人称で書かれているポルノ小説と非常によく似ており、男性読者の存在もある程度考えられる)。一口に性関連情報といってもこの二つのジャンル間のギャップが大きく、メッセージが混乱しているように思われる。

H系雑誌はどれも性情報が多いことは共通しているが、内容的には各誌独自の路線を持っている。『エルティーン』『パステルティーン』にはイラスト投稿(セックスシーン、マスターベーションシーンなど主に女性の描写が中心)も含め、<エロティック・フィクション>(性行為に関する記述が全文の半分以上か、局部に関する詳細な描写があるもの)が多く、性関連投稿が一番多い『おちゃっぴー』はそうしたポルノ的なものは少なく、むしろ妊娠、中絶などのセックス関連の比較的深刻な悩み告白投稿が多い(ちなみに『おちゃっぴー』は97年10月号をもって休刊した)。『パステルティーン』は特に「パステルコミックマーケット」というコーナーもあり、イラスト投稿が多いことが特徴的で、いかにもおたく的(俗に「やおい」と呼ばれる同人誌文化から派生したもの)なポルノ・イラスト(ホモセクシャルの絡みなど)もみられる。

また、投稿以外の記事(特に袋とじ企画)でも『エルティーン』のポルノ度が一番強く、性器の表現一つ取ってもまったく隠語や伏せ字を使わずストレートに表現しているのが目に付く。

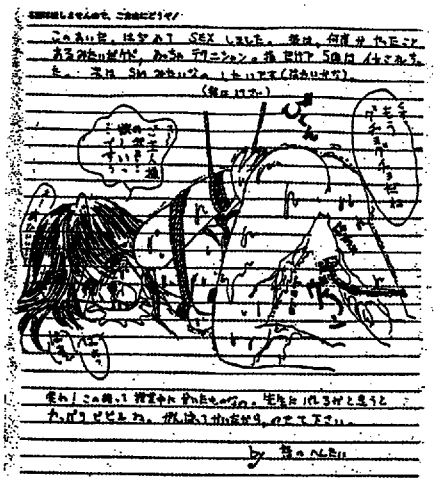
97年のH系雑誌における性関連記事の例(＊はリプロダクティブヘルスに関する知識が得られる記事)

	9月号	10月号
エルティーン	・「平成男子調査報告Q&A」(8p)～「恋愛」「エッチ」「SEX」の3部構成 ・「赤っ恥ア・ラ・カルトーッ！！」(3p)～Hの失敗談 ・「ただいまヤリコン蔓延ちゅー！！」(3p) ・「どえっち全開！！夏の思い出！！」(袋と	・「男の子と女の子の心とカラダの交際マニュアル」(5p)～記事コピー「立ったチンポと濡れたオマンコがあればエッチはできる！！でもソレだけじゃサミシーじゃん。エッチ友達が100人いるより本気でキミを愛しているラバーがひとりいるほうがイイ。…」

	じ7p)～読者投稿の形を取っているがある程度脚色されている。内容は体育用具室で同級生にロープで手首を縛られて犯される／海岸でレイプされ 3P・アナルセックス／王様ゲームでレイプされ 7P／犬とバイブを使ってマスターベーション／レズの後に4Pなどアダルトビデオ顔負け ・「胸は大きくなる！」(3p) **＊「心と体の悩みごとQ&A」(2p)**～定例ページ ・「なんでもかんでもメッセージ」(5p)～定例ページ。読者投稿によるH体験談、過激なHイラストなど。採用された人には 2000 円の原稿料あり。 ＜性関連記事の全体ページに占める割合 16.8%＞	・「ナンパがきっかけ交際のココがミソ！！」(3p) ・「ひとりH完全マニュアル」(3p)～「ひとりHはSEXまでの訓練」「オカズを用意する～『なんかもメッセージ』のページを活用してるって声をよく聞くゾ」など ・「イタズラな唇・女のコたちの秘蔵マイ・テク初公開」(袋とじ7p)～「これが私の『よがらせ』テク」「手コキ」「フェラチオ」「シックスナイン」「アナル」「素股」 ・「好きな人の子供…産んだ方が良かった～妊娠中絶」(2p)～読者投稿 ・「実況生ルポ援助交際」(3p) ・その他定例ページは 9 月号参照。 ＜性関連記事の全体ページに占める割合 21.6%＞
おちゃっぴー	・「TESTでわかるじつはアナタのカレHOOくん」(2p)～Hの好みがわかるチャート ・「ドーテーくん 秘 話」(2p) ・「夏休み中！！ 秘 H座談会」(2p) ・「読者体験告白 友達はこんなことをしている」(14p)～定例ページ「イタズラされたのにいとこのK君が今でも好きです」「Fなんか大キライ！そして、気持ちよくないよHなんか！」など **＊「ヒニンのウソ ホント」(6p)** **＊「セックス&ボディーの相談コーナー」(1p)** ・「大好きKiss」(4p)～街頭カップルのキス写真 ・マンガ「読者体験告白もうひとりのワタシ」(12p)～小学生時代のイタズラ体験から中学生のBFとのテレホンSEXまで ＜性関連記事の全体ページに占める割合 33.5%＞	・「僕の彼女は名器ですか？」(6p) ・「H心理テスト」(4p) ・「Cinderella・ Boy」(7p)～男の子カタログでHについても質問 ・「男の子のオナニー進化論」(2p) ・「彼女にしたい女・やりたい女」「ハダカでもイケてる女」(4p) ・「私の彼はテクニシャン」(2p)～投稿風だがライターが書いている ・定例読者体験告白(14p)～「義父が毎晩襲ってくる」「いつもいつも私はフェラ用の女なの？」「最近 H が気持ちいいんです。でも、生理がこないの！自業自得だよね…！」「愛のない H はもーイヤッ！！」「おまえはヤルだけの女だったって…」 ・「Kiss選手権」(5p)～キス写真とHの頻度についての質問 ・97ナツHバトル!!(2p)～読者投稿 ・マンガ「読者体験告白 初めて愛したのに」(12p)バイト先の店長との不倫、セックスシーン(2p)あり ＜性関連記事の全体ページに占める割合 49.2%＞
パステルティーン	・定例記事「パステル通信」(8p)～コピー「H 大好き！オナニー大好き！SM もちょっと好きな少女のための過激で楽しいこのコーナー。H体験談、大胆イラストがいーっぱい～「キュウリのちくちくでイッちゃった」「プールでHベッドより感じちゃうよ！」など ・「レイプされた 忘れたいあの夏」(4p) **＊「やられたー！Hの後のいらない置き土産」(4p)**～性病に関する記事、セックスシーンの写真入。 **＊定例記事「ドクトルチエコのメディカルQ&A」(2p)** ・マンガ「ALICE」(16p)～うち6pがロリコンセックス ・「みんなのH用語ギモンチンモン」(2p) ・「ロストバージン～私の初体験談」(4p)～写真入 ・定例記事「ルージュの伝言」(6p)、「ショッ	・「初キスは交際して何日目？」(3p)～街頭アンケート ・定例記事「パステル通信」(8p)～「病院でのエッチはスリルがあって楽しいよ」「先生との4Pはめちゃくちゃカゲキ！」ほか読者投稿、イラストあり ・「今月のお勉強:Hの体位・愛の48手」(4p)～イラストおよび写真による体位の解説 ・「女のコの浮気願望」(3p)～投稿と覆面座談会形式、セックスシーンの写真入 ・「How to 1 人H！！」(3p)～写真・イラスト入り ・マンガ「Legret」(16p)～援助交際、集団レイプ ・「オススメBOOK・Hマンガ」(2p) ・「私の生理失敗談」(4p) (定例記事は 9 月号参照)

	キングレポート」(3p)などでは、中絶、援助交際、レイプなどの悩み告白も登場する ・携帯・PHSで友人・恋人を紹介するカモメネットワークの広告やWindows95 専用アダルトCDの広告 ＜性関連記事の全体ページに占める割合21.6%＞	＜性関連記事の全体ページに占める割合39.9%＞

『エルティーン』10月号投稿イラスト



＜考察＞一般総合誌に比べるとこれらの雑誌の方がリプロダクティブヘルスに関する情報は多いといえるが、その一方でそれらの情報はポルノ的快楽志向の情報に圧倒されている感がある。フェラチオ、アナル、３Ｐなどのセックスプレイに関する細かい情報が与えられる一方で、避妊・性感染症などリプロダクティブヘルスに関する知識が得られるような記事は、全体ページの５％に満たない。また、『エルティーン』の「ひとりＨ完全マニュアル」などの記事にみるように、少女たちにもマスターベーション・カルチャーが出来上がりつつあるようだ（男性誌ではオナペット写真など以前からそういう文化が定着している)。従来の少女文化が処女性を強調し、性に対して抑圧的であったことを考えると、このことは必ずしも否定すべき変化ではない。しかし、その性的想像力が男性主体の性文化のコピーでしかないことには問題がある。投稿イラストを見ても、女性器が画面の中心に描き出されるなど、どれも男性向けアダルトコミック誌そのままであり、文章もレイプから快感へというストーリー展開が繰り返されるのは、非常に気になるところだ。グループインタビューでは、これらのＨ系雑誌は中学時代（おそらく異性との性交渉を体験する以前）に面白がって読むものだ、という意見が出てくるが、彼女たちがこのような女性に対して抑圧的な言説から性のあり方を学習していくのだとすると、かなり問題がある。

● コギャル系雑誌

一見して登場するモデルがすべて素人の中高生であること、ルーズソックスをはいた制服姿の写真が多いこと、私服でも髪型（茶髪ロング)、ピアス、日焼け、細眉、カラーコンタクトで、さらにファッションも典型的なコギャルが多いことなどから、「コギャル系」と分類したが、性情報に関しては、全く異なる傾向を持つことがわかった。内容的にも大きく３つの群に分けられる。

① 学研から出されている『東京ストリートニュース』(94 年創刊）はスカウトされたり応募したりして集められた男女高校生たちのライフスタイルが実名･高校名入り(伏せてある場合もある）でカタログ的に紹介されているほか、学園祭の情報なども載っていて、少女誌というより、首都圏の高校生活情報誌とでも言えるような内容である。性関連記事は全くない。

② 主婦の友社から出ている『Ｃａｗａｉｉ』は女子高生向けファッション・美容専門誌であり、これもまた全く性関連記事がない。『東京ストリートニュース』同様、学園祭の情報、「イケてる男の子」の紹介などもあるが、女子高生モデルの比率が圧倒的に高い。

③『egg』（ミリオン出版）と『Snap×２』（辰巳出版）は共にアダルト系出版物を扱う出版社から出されており、内容的にも酷似している。前者は性関連記事の割合が全体ページの３％前後、後者は 10%強を占めているが、内容的にはポルノ的な性体験投稿や援助交際体験者の座談会などが中心で、リプロダクティブヘルス関連の情報はほとんどない。援助交際はちょっと危ない遊びと言う感じでカジュアルに紹介されている。さらに

多くのページを読者からの投稿写真やプリクラの紹介に割いている。ナンパ関連の話題が多い。男の子のオナニー関連の座談会や、男子高校生の写真投稿もある。写真入の恋人募集（男女とも）など人間カタログの感がある。ラブホテルでのスナップ写真（きわどい部分はカラーペイントで隠してある）などもある。編集部側で撮影した水着姿の写真などは男性読者を意識していることが感じられる。伝言ダイヤルや恋人紹介サービスの広告が入っている。他のアダルト誌出版社からも同工異曲の雑誌（桃園書房から『Heart Candy』コアマガジン社から『Pretty Club』）が出ている。

97年のコギャル系雑誌における性関連記事の例

	9月号	10月号
東京ストリートニュース	・　性関連記事まったくなし	・　性関連記事まったくなし
Cawaii	・　性関連記事まったくなし	・　性関連記事まったくなし
Egg	・　「Scramble Egg」という投稿欄～「すごい！Or変わった人とのH体験談を教えて！」(1p) ・　「匿名だからホンキで告白！アニマルエッチ女子高生大会」(2p) ・　「Ero・Ero座談会」(2p)～援助交際について ＜性関連記事の全体ページに占める割合 3.9%＞	・　「Scramble Egg」という投稿欄～「H系でこれだけ人に自慢できる事はナニ？」(1p) ・　「Ero・Ero座談会」(2p)～援助交際について ・　編集部のスタッフのペンネームがアナルッチ東宮など ＜性関連記事の全体ページに占める割合 2.3%＞
SNAP×2	・　「Fresh Erotic News: Street Voice File」(7p)～ストリートで聞いた過激で危ない話 ・　「イケてるスペシャル座談会～Hが大好きな女子高生は危ないテレクラが好き？」(2p) ・　「特集ラブホ こんなことしちゃっていいのかなァ～」(2p)～ラブホテルで裸で抱き合うカップルの写真投稿(ペイントで修正している) ・　「全国のKissスナップ自慢大募集中」(2p) ＜性関連記事の全体ページに占める割合 11.4%＞	・　「Fresh Erotic News: Street Voice File」(6p) ・　「LOVE×2カップルSNAP×2」(7p)～街頭カップルスナップおよび質問「初Hは付き合って何日目」？ ・　「イケてるバクレツスペシャル座談会～私立の女子校に通うこの仲良し3人は清純派に見えてかなりH！」(2p) ・ ＜性関連記事の全体ページに占める割合 13.2%＞

＜考察＞いずれも90年代中頃以降、女子高生がブームになってから登場した雑誌である。上記の3グループに共通するのは、読者モデルを起用していること、街頭などで撮影会を行なっていること、その月に登場した読者モデルの人気投票をしていること、編集部に気軽に遊びに来るように呼びかけていること、などである。

読者モデルと言う意味ではこれらの雑誌も読者参加型だが、『おちゃっぴー』などの告白投稿誌が文章とイラストに限られているのに対し、こちらは街頭撮影会などに出かけたり、自分や友人の写真やプリクラを投稿するなど、生身の人間のビジュアルイメージが流通するようになっている。少女たちだけでなく、少年の写真も多い。モデル幻想（スタイル抜群）にこだわらない誌面作りという意味では評価できるが、カタログ的に人間を並べて見るメンタリティの発露でもある。自分の容姿をコミュニケーションのツールに使い、さらには収入源として使うことが日常化しているのではないか。H系バイトの多様化とも関連した変化であろう。

特に③のアダルト誌出版社から出ているコギャル雑誌については、男子高校生だけでなく成人男性読者の存在も想定できる。実際に『egg』はそもそも男性誌としてスタートした雑誌であり、96年まではセミヌードも掲載していた。[6]そういう意味では読者モデルと言っても、同じ出版社のアダルト誌モデルとの関連性が気になるし、伝言ダイヤルの広告掲載、援助交際についてのカジュアルな座談会などの誌面づくりは性の商品化に拍車をかける可能性があり、今後慎重に見守っていく必要を感じる。

II. 時系列比較（年表および内容分析）

上記の内容分析では、H系雑誌における性情報の量の多さと過激さが目立ったが、果してこれは最近の傾向なのだろうか。それを知るために、まず1980年まで遡って、少女雑誌の創刊・廃刊の動き、少女をめぐるその他のメディアの動きを調べて年表にまとめ、さらに1980年代前半の少女誌（特に性情報を売り物にしていた雑誌）の内容分析を行ない、今日の少女誌と比較した。

①1980~97年の少女をめぐるメディアの動きについて（年表参照）

＜1980～1984年＞ 1980年の『ポップティーン』の創刊を皮切りに82年の『エルティーン』、83年の『Kiss』『キャロットギャルズ』と相次いで、SEX情報記事を載せた少女誌が創刊され、マスコミの話題を呼んだ。『積み木くずし』がベストセラーになるなど、いわゆる「ツッパリ文化」全盛期。84年2月には衆議院予算委員会で、三塚議員が少女雑誌の過激なセックス記事を問題視して政府に対応を迫ったことをきっかけに、青少年雑誌からテープまでを含めた図書の販売規制を目指して議員立法の試案まで作られたが、結局見送りとなっている。しかし、その余波で、学研が出していた『Kiss』は廃刊になり、その他の雑誌も内容を変更したり、性情報について自粛したりする動きが見られた。

＜85～88年＞ 第二次ベビーブーム世代（1971～74年生まれ）がティーンエイジに達するのを見込んで、85～87年はティーンズ誌の創刊ブームを迎える。85年にはテレビで『夕やけニャンニャン』の放映が始まり、第一次女子高生ブームを迎える。同年、新風俗営業法が施行され、その後の風俗産業の再編の動きの中からテレクラや伝言ダイヤルが浮上してくる。

＜89～92年＞ 89年には第二次ベビーブーム世代が高校生になり、都内私立女子校文化が開花し、マーケティング業界の注目を集め始める。ファッション誌を中心に少女誌の創刊が相次ぎ、『MC Sister』『Junie』『プチセブン』など既存の少女誌もファッションに力を入れて部数を伸ばした。また、『おちゃっぴー』をはじめとする性体験告白誌の好調で、『パステルティーン』『ｆｕｕセブンティーン』などの新規参入が相次いだ。

＜93～97年＞ 93年には多くの第二次ベビーブーム世代が成人し、少女誌の急伸は頭打ちになる。ポスト第二次ベビーブーム世代を中心に、それまでの中高生ファッションとは違った、コギャルファッションが流行する。これが第二次女子高生ブームである。翌94年には「援助交際」という語がマスコミで流通し始め、女子中高生と成人男性の間の関係性に大きな変容が訪れた（そこでマスコミが果たした役割については宮台［1997］を参照）[7]。この年以降、『東京ストリートニュース』『egg』『Cawaii』などのコギャル系雑誌が相次いで創刊される。96～7年には『Yummy』『fuu セブンティーン』『おちゃっぴー』などのH系告白投稿雑誌の休刊が相次ぎ、老舗の『ポップティーン』も、編集方針を変更。現在はH系雑誌に蔭りが見え始めている。

②1980～97年の少女をめぐる報道の変化について（「大宅壮一文庫索引総目録」より）

添付した年表の「少女をめぐるメディアの動き」の欄に、「大宅壮一文庫索引総目録」の中で「高校生」を見出し語とした記事のうちの女子生徒を取り上げた記事件数と、「少女売春」を見出し語とした記事件数を掲載した。「索引総目録」では週刊・月刊を問わず、代表的な大人向けの総合誌・男性誌・女性誌の記事タイトルを索引化してあり、（全ての記事が網羅されているわけではないが）大人向けメディアにおける記事のおおよその動向が把握できる。これを見ると、どちらの見出し語にも2つのピークがあり、それが85年の第一次女子高生ブーム、および93～5年の第二次女子高生ブームと一致している。

その中で興味深いのは、第二次女子高生ブームの際の、女子高校生を取り上げた記事の爆発的な増加（94年に78件）に比べ、「少女売春」を見出し語にした記事の増加が94年のピーク時でも24件と、かなり緩やかなことだ。実際にテレクラや援助交際が社会問題となり、淫行条例や児童福祉法違反で保護・補導されている少年女子の数も増加してい

るにもかかわらず、「少女売春」を見出し語にした記事がさほど増えないのは、「女子高生」そのものがメディアによって性的な商品と捉えられるようになり、あえて「少女売春」という逸脱行為の文脈で語る意味がなくなりつつあるからではなかろうか。

③少女雑誌の内容の経時的変化について（80年代前半の少女誌との比較）

1984年2月の国会で問題にされた少女雑誌の内容とはどのようなものだったのだろうか。Ⅰの内容分析で見たような、今日のH系雑誌の内容と比べてどのように違うのだろうか。ここでは、当時からかなり過激だとされていた『エルティーン』および国会論議のあおりを受けて誌名変更を余儀なくされた『ギャルズライフ』の2誌について1982～83年のバックナンバーからランダムに3号ずつ選んで、内容を分析した（以下の例には2号分だけ紹介）。

80年代前半のH系雑誌における性関連記事の例（＊はリプロダクティブヘルスに関する知識が得られる記事）

	82年8月号	83年2月号
エルティーン（月刊）	・「愛の白書—ロストバージン」（4p）～体験告白 **＊「キミってナプキン派？タンポン派？」（6p）～**月経の仕組みについて ・「もうちょっとで「オナニー優等生」になれちゃウッ！！」（7p）～制服姿のオナニーシーンの写真入、さわり方の図解、罪悪感の否定 **＊「ワールド・レポートスウェーデンの若者たちの愛と性」（5p）**～若者の正しい性のあり方 ・「この夏キミは映画でさわやか初体験」（5p）～セックスがテーマの映画紹介 **＊「ジュニアの妊娠と避妊の知識」（16p）**～図解入りの丁寧な性教育、性器の説明、妊娠の仕組み、避妊法の紹介、映画の中の比較的マイルドなセックスシーンの写真入り ・「フレンドコーナー」（3p）～セックスがらみの短い投書コーナー <性関連記事の占める割合 27.1%>	・「ファースト・キスはどんな味？」（5p）～上半身ヌードの男女の写真入、How Toもの、Bまで解説 **＊「男のコ・女のコ別ボディの悩み相談室」（6p）**～男女両方の身体の悩み、ヌード写真多い ・「修学旅行中に押し入れでCをする」（5p）～中学生は進んでいるというレポート、匿名インタビュー ・「痴漢撃退法」（4p） ・「愛の白書・私のタイケン告白記」（4p）～キス程度、真面目 ・「大人のおもちゃ屋探検記」（5p） **＊「必読ジュニアの避妊法あとで泣くより先にテを打て！！」（7p）**～基礎体温法、コンドームだけでなく、ピル、IUDなども説明されている ・「ラブホテル落書き帳・熱～い囁きが聞こえそうよ」（4p）～写真と抜書き ・「レンタルームってどんなとこ？喫茶店にはいるつもりで入ってみよっ」（5p） ・「ぱおぱおテレックス」（3p）～セックスがらみの短い投書コーナー <性関連記事の占める割合 28.2%>
	83年8月5日号	83年10月14日号
ギャルズライフ（隔週刊）	・「女の子の成り上がり職業」（12p）～風俗嬢のライフスタイル紹介、夕ぐれ族オーナー筒見待子も登場、風俗業関連だけで6p ・「こんな下着でベッドにおいで」（8p）～下着のカタログ、男の好み、着こなし方 ・「ドキュメント中学生売春」（5p）～売春グループのリーダーの告白 ・「こんな女とは寝たくない！」（4p）～覆面男子高校生座談会 ・フォト劇画「さよならガラスの家」（16p）～ヌードのセックスシーンあり、義父によるレイプが1p ・投稿コラム「Gal's Sex」（2p）～ロストバージン体験、「番はってる」ような子の告白 ・「ポルノでおべんきょ」（8p）～美保純らポルノの星の紹介、わくわくポーズ ・定例「ギャルトマ通信」の中にもセックス関連の話題あり ・「10代熱中体験」という定例コラムも	・「ドキュメント・外タレグルーピー」（6p）～20歳、40人の外タレと寝た女性の紹介 ・「クラブ別男のコの性格」（5p）～主にSEX占い ・投稿コラム「Gal's Sex」（2p）～結婚するまでセックスしないと決めた女の子 ・「彼のホモ度診断テスト」（2p） ・「女の子自由自在」（2p）～田中康夫の連載、セックステクニックについてポルノ的な紹介 ・「二人っきりのラブ・タッチ」（8p）～セックステクニックの図解入りノウハウ

	セックス関連の投稿が多い <性関連記事の占める割合 19.8%>	<性関連記事の占める割合 13.3%>

<考察>『エルティーン』の性情報の量は全体ページの 25%強、『ギャルズライフ』の方が 15%前後と、『エルティーン』の方がやや過激である。近代映画社を版元とする『エルティーン』の性情報記事には映画からのスチル写真が多用されていて、かなり生々しい。中学生のセックスも取り上げられているほか、マスターベーションのノウハウ紹介などは、性器の図解入り、制服姿の少女のオナニーシーンの写真入り、とかなり内容的にも過激である。量的にも 97 年の『エルティーン』『パステルティーン』とほぼ同じである。当時はこれら以外にも『ポップティーン』『Ｋｉｓｓ』など性情報を売り物にする雑誌が数多くあったことを考えると、近年の少女誌の性行動の変化を、単純に少女メディアにおける性情報の量的変化に帰することはできない。

一方、90 年代の雑誌と大きく違うところは、第一に編集部側の企画記事が多いことだろう。『エルティーン』82 年 3 月号では、「ジュニアの妊娠と避妊の知識」という、なんと 16 ページにも及ぶ特集が組まれているし、前述したマスターベーションのノウハウ記事も同月号に載っている。性病や性器に関する悩みなどに答える記事も充実している。『ギャルズライフ』でも「二人っきりのラブタッチ」(83 年 10 月 14 日号) など、やはりノウハウ記事に 8 ページを割いているが、こちらはリプロダクティブヘルスに関する情報はあまり多くない。

第二の違いは、読者投稿の質であろう。これらの雑誌は『おちゃっぴー』のような告白投稿誌ではないので、読者投稿の量は 97 年の『エルティーン』並みであるが、97 年のそれのようにポルノ的な要素を持った投稿はかなり少ない。投稿の中には初めてキスをした、バージンでいたいなどといった、大人しい内容のものもかなり多く、性体験を綴ったものでもロストバージン体験で「痛かった」云々というものが多い。明らかにフィクショナルな、レイプなどを盛り込んだポルノ投稿はほとんど見られない。近年の少女誌のポルノ化は、主に読者投稿にリードされた現象であり、編集部側の選択基準がそれに一層の拍車をかけている傾向はあるものの、その内容から考えて少女たちが既に少女雑誌以外のソース（例えばアダルト・ビデオ、アダルト・コミック等）から性情報を入手してそれを再生産している可能性が強い。

III. 国際比較（アメリカ少女誌内容分析）

ここではアメリカの少女誌を代表する『Seventeen』『YM』『Teen』の 3 誌について検討する。これらについては書店への入荷時期が日本の雑誌とはずれているため、97 年 8 月号と 9 月号の 2 ヶ月分の分析を行なった。各誌とも公称発行部数は 100 万部を超えていて、日本の少女誌の倍以上であるが、アメリカの雑誌業界において 100 万部雑誌はざらであって、決して飛びぬけた数字ではない（例えば『Cosmopolitan』などは 270 万部を超える)。一方、アメリカにおいては、ティーンズ向け雑誌の細分化が日本ほど進んでおらず、これら 3 誌はどれも一般総合誌といえるようなものである。強いて言えば『Teen』は美容に重点を置いており、読者層がやや若く、『YM』が一番読者の年齢が高いと思われる。(これら以外には fanzine と呼ばれるアイドル誌があるが、日本の『MC Sister』のようなティーンズ向けファッション専門誌や、『おちゃっぴー』のような性情報を売り物にする雑誌は存在しない。)

97 年の米国少女雑誌における性関連記事の例（＊はリプロダクティブヘルスに関する知識が得られる記事）

	8月号	9月号
Seventeen	・「relating」(2p)～「上手なキスの仕方をどうやってBFに教えるか」「仲の良い男友達とセックスしてしまった(ちゃんとコンドームをしていたとわざわざ断りが入っている)がこの先どうしようか」といった悩みが、家族内の不和や友人関係の軋みと同列に扱われている。編集者からの回答の	・「relating」(3p)～転校先でのいじめ、拒食症の友人などについての相談に「さみしいので大して親しくもない男の子と次々セックスする」という女の子の悩みが2p ＊「sex＋body」(2p)～月経の仕組み、生理不順、タンポンの使い方、生理中の運動、PMS、

	他、参考にすべき書籍やビデオ(商業映画が多い)が紹介されている ＊「sex＋body」(2p)～「初めての子宮ガン検診を受けたが、性感染症もこれでわかるのか？」「男の子は勃起したら射精しなくちゃいけないか」「ピルの仕組みはどうなっているの？どこで買える？」 ・「guys」(5p)～恋愛についてのことが中心の相談室。身体的接触に関する情報は「初めてのキスはどうすればいいか」「友達の彼にキスされた」などの相談が1Pだけ。 <性関連記事の全体ページに占める割合 2.0%>	生理痛の対処の仕方など。 <性関連記事の全体ページに占める割合 1.9%>
YM	・「guy talk」「love crisis」「Romance」「you & him」「ask anything」などの定例記事は主に恋愛および性に関わるテーマを取り上げる。 ・「love crisis」(1p)～「自分がバージンだということをいつBFに伝えたらいいか」「BFが他の女の子とセックスした、コンドームは使ったって言うけど…」「知ってる男の子にセックスを強要された、これもレイプ?」 ・「ask anything」(1p)～「オルガズムってどんな感じ？」という質問が、試験のストレス、恋愛の悩みに混じっている。 ・前号の近親姦に関する特集記事に対する読者の反応も掲載されている。 ・「guy watching」(2p)～かっこいい素人の男の子を紹介するページ。 <性関連記事の全体ページに占める割合 3.9%>	・「guy talk」(1p)～男の子アンケート調査「付き合い初めてからセックスをするまでどのくらい待つか？」 ・「love crisis」(1p)～「私は 15 歳、20 歳の男性に付き合って欲しいと言われているけど…」という質問に対しては心理学者及び法律家のアドバイスを引いて止めたほうがいいと答えている。 ＊「ask anything」(2p)～「タンポンしたままでセックスできるか」(答:それは駄目だが生理中にセックスするなら diaphragm を使えばいい)「マスターベーションする私は変態？」(答:誰でもやっており、恥じることはない) <性関連記事の全体ページに占める割合 3.2%>
TEEN	・「ask a guy」「love doctor」「sex & body talk」という悩み相談の定例記事がある。 ・「ask a guy」(1p)～「どうして男の子はパーティでHなことをしたがるの？」 ・「love doctor」(1p)～「自分は本当にセックスをしたいとは思わないけど、断ってBFをたいたくない、どうしたらいいか」(答:したくないのにセックスしてもいいことはない。もし「皆やってるぜ」と言われたら、全米の 15～19 歳の女の子の半分しか性体験を持っていないということを言ってやりなさい) ・「Pregnant on Purpose」(3p)～高校中退ヤンママの生活についての記事。避妊と中絶の注意だけでなく、10代の出産の問題点についても検討。 <性関連記事の全体ページに占める割合 3.2%>	・「ask juli」(1p)～「養女である友人の近親姦の悩み」(答:Child Abuse ホットラインの紹介) ＊「sex & body talk」(1p)～「最近、性交痛があるんだけど…」(答:膣炎についてのホームページ紹介)「diaphragm と cervical cap の違いは何？」「PMS とにきびの関係」「妊娠試験薬は正確か」「経血量が多すぎる？」 <性関連記事の全体ページに占める割合 1.3%>

● アメリカの雑誌は日本の雑誌に比べ、全体にロマンチックでありながら禁欲的である。雑誌のかなりのページが恋愛関係の記事に割かれているが、身体性を伴う性関連記事は全体ページの１～３％程度であり、日本の一般総合誌並みである（但し、商品情報も日本の総合誌よりずっと少なく、もっと社会派の記事が多い)。恋愛を精神性と身体性の両面から捉え、性行動を心理面から切り離していないので、セックスだけを興味本位にとりあげることはない。読者投稿もあるにはあるが、主に悩み相談の形を取っており、かなり編集部側が主導権を握って啓発的な記事作りをしている。日本の少女誌のように読者間の情報交換、自己表現の場としてのメディアの主体的な利用、といった動きは見られない。

● 身体関連情報は、妊娠や性感染症の問題ばかりを取り上げるのではなく、拒食症、アルコール／麻薬中毒、うつ病など、若者が直面するさまざまな問題の一部として位置づけられている。単に説明に留まらず、実際に問題に直面した場合、ホットラインやホームページなど、どこに救いを求めたらいいかが具体的に提示されている。セックス情報についてはエイズを意識してコンドーム着用が繰り返し強調される。また、処女を守るにせよ、セックスをするにせよ、相手の要求に流されずに自分の意志で性行動に臨むことの重要性を繰り返し主張している（「たとえデートで酒に酔っていても、またはBまで許していても、合意がないまま犯されたらそれはレイプである」）。日本の雑誌がセックスプレイの一つとしてしか扱わない同性愛も、アイデンティティの問題として取り上げている。また、婦人科検診の勧め（「18歳になるか、性体験を持つようになったら」婦人科デビュー）を始めとして、「ＢＦが浮気したと分かったら性感染症の検査を受けよう」など、自分の身体に対する知識と自己管理の教育が徹底されている。

● また、直接に性情報ではないが、読者側の身体意識の問題として、記事に対する意見・感想の欄にはしばしばモデルの体型についてのコメントが出てくる。例えば『TEEN』８月号の「５月号の水着特集に出ていたモデルのうちの二人はあばら骨が浮いていたけど、ああいうのは決して魅力的ではないと思う。雑誌やＴＶを見て自分の身体イメージに影響を受ける人もいるし」という意見や、『Seventeen』８月号の「５月号のファッション記事で、普通の体型をしたモデルを使ってくれてありがとう。美しい身体とは必ずしもワン・サイズでなく、いろんな大きさや形があり得ることを理解してくれたのを嬉しく思います」などという意見には、摂食障害がアメリカで深刻な社会問題になっていることを感じさせるだけでなく、その背景にメディアによって広められる美の基準があることを、ティーンズ自身が気づくような啓発が行われていることを実感させる。（もちろんこれらの投稿はヤラセの可能性もあるが、その場合でも少女誌がそうした啓発活動に貢献していることに変わりはない。）ちなみに『TEEN』編集部は上記の苦情に対し「私たちは人々が雑誌の記事を手本にすることを考慮して、モデルを選ぶ際には十分に気をつけています。今回の写真ではモデルたちがやや変な体勢を取っているためにあばらが浮き出て見えるのです」などと釈明までしている。

＜考察＞ 以上の比較の中から見出された日本の雑誌の問題点は、①読者のリプロダクティブヘルス／ライツに関する問題意識を育てて行こうという姿勢に欠けていること、②性情報を読者発信型にすることで、編集側が未成年読者に対する責任を回避しているように見受けられること、③読者側に既存の性情報に対する批判的視座が全く育っていないこと、④与えられる情報がノウハウ優先型あるいはメロドラマ型で、実際に問題に直面している少女たちの救いに全くならないこと、などである。

アンジェラ・マクロビー（1991）[8]はイギリスの少女雑誌が80年代に読者本位の記事作りに編集方針を転換したのは、編集者たち自身が文学研究における読者理論とフェミニズムの影響を受けた世代に代わったからだと論じている。同様にメリッサ・ミルキー（1996）[9]はアメリカの少女雑誌の編集者へのインタビューを行ない、編集者自身がモデルの体型が一般の女性のそれとはかけ離れていることについて、強い問題意識を抱いていることを確認している。確かに編集者がそういう意識を抱いていても、広告スポンサーの要求や売れ行き動向などに左右され、必ずしも少女たちの要求に応えることはできないのだが、敢えてこのような投稿を選ぶことで、ある程度問題の解決を図っていく努力がなされていると見ることも出来よう。

それに対し、平成８年度厚生省心身障害研究における、日本の若者向け雑誌の編集者へのインタビュー[10]では、若者の性行動が心身の健康にどのような影響を及ぼしているかということについて編集者があまり関心を持っていないことが明らかにされている。個人的には男女間のよりよい関係作りや正確な性知識の伝達を望んでいる場合でも、「売れる雑誌」にするという使命とのジレンマがあることもわかっており、今後は商業ベースの雑誌の中にいかにして有用なメッセージを滑り込ませるかのノウハウ開発が求められる。

IV. フォーカス・グループ・インタビュー

メディア情報の内容分析という手法はしばしば、テキストを利用実態と切り離して捉えることから、「研究者の読み」が一人歩きする危険性を持つ。よって本研究では、メディア利用者の主体性および利用実態について把握することを目的に、都内私立女子校2校の生徒（A学園高校一年生4人組とB女子高校3年生2人組）にそれぞれ2時間程度のインタビューを行なった。場所は新宿のカラオケボックスで、面接者は女性3名（20代前半、20代後半、30代後半）。サンプリングはランダムではなく、知人からの紹介によるが、面接者とはインタビュー時が初対面である。面接内容は録音しテープ起こしした。この調査は綿密な発話分析を目的とするものではないことから、結果についてはグループごとに出てきた答えをまとめて表にする形をとった。グループ内で意見が相違した点についてはそれぞれの意見を表中に反映させるようにした。

サンプル数が少ない上、東京の私立女子校（両グループとも卒業後は大学進学を予定している）ということで地域特性や階層特性があり、結果については必ずしも一般化はできないが、昨今の女子高生ブームに対する考え方などは、他のアンケート調査[11~12]の結果などと一致する部分も多い。

（1）雑誌利用実態～まず初めに、こちらが持参した19誌の少女誌（コミック誌、アイドル誌は含まない）を手にとってもらいながら、よく読む雑誌はどれか、雑誌をタイプ別に分類するとどうなるか、個々の雑誌をどう思うかなどについて意見を出してもらった。

こちらが持っていった１９誌についての女子高生の意識

	8月27日・A学園（高1）組	9月2日・B女子高校（高3）組
普段雑誌をよく買うか	毎号買うのはアイドル雑誌あるいは音楽雑誌（月に2～3冊）、あとは立ち読みするか、割り勘で買ってまわし読みする。	ほとんど買わない、立ち読みする
よく読む雑誌	MC Sister、プチセブン、セブンティーン（自分で買うこともある）	Cawaii、egg、東京ストリートニュース（知ってる人が出てたりするのでわりと読む）
たまに読む（立ち読みしたり、まわし読みしたりしたことのある）雑誌（自由にジャンル別に分類してもらうと）	**コギャルっぽい**～ポップティーン、Snap×2、Cawaii **ファッション**～PeeWee、Junie（学校の図書室にある）、オリーブ **Hっぽい**～エルティーン、おちゃっぴー、パステルティーン、My Birthday **（ストリート系）**～Zipper,東京ストリートニュース（自分たちでは名前をつけられなかった、とりあえずひとつのグループに分類）	**コギャルっぽい**～Snap×2、Cawaii、egg、東京ストリートニュース **ファッション**～オリーブ、S.O.S.、Pee Wee、Junie、Zipper **Hっぽい**～おちゃっぴー、エルティーン **中学生向け**～ポップティーン、Lemon、プチセブン、セブンティーン、MC Sister
読んだことがない雑誌	egg（1名だけ昨日立ち読み）、Heart Candy、S.O.S.、PrettyClub	パステルティーン、MyBirthday、PrettyClub、Heart Candy
これ以外によく読む雑誌	明星、ポテト、Wink up、JUNON、ポポロ、B-PASS、What's in、テレキッズ、non・no	CanCam、JJ、Ray、ViVi
これ以外に時々読む雑誌	an・an（美容院で）、りぼん（妹が買ってくるから）、コミック誌は歯医者で読む	別冊マーガレット、りぼん、JUNON
その他のコメント	JJとかViViは高いし重たいので読まない。eggは先輩とか出てそうだと思った。	non・noとかMC Sisterは中学生まで。今学校で回っているのは、Junie、オリーブなど。

(2) H系雑誌について～次に彼女らが「Hっぽい」として挙げた雑誌についての彼女らの考え方を聞いた。読んだことのあるH系雑誌はA学園組が『おちゃっぴー』『エルティーン』『パステルティーン』(『マイバースデー』も挙げているが、これは占いが中心で実際には性情報はそれほど多くない)、B女子校組が『エルティーン』のみである。

H系雑誌についての考え方

	8月27日・A学園（高1）組	9月2日・B女子高校（高3）組
最近読んだか いつ頃読んだか	パステルティーンは中3のとき流行って、お昼休みに皆でお弁当食べてるときに机の上においてあったりして、気持ち悪くなった。最近は読んでもしょうがない。(中には読んだことない、という子もいた。)	エルティーンを読んだのは中1とか中2の、そういうことに興味がある頃で、高校生になると現実的になりすぎる。
どうやって読んだか	学校で昼休み、みんなと一緒に。他のクラスから回ってくることもあるので、誰が買っているかわからない。内容について話し合うことはあまりない。「気持ち悪かったね」とか。たまに進んでる子が「やってるらしいよ」とか。	みんなで回し読みするということはしたことがない
どう思う？	すごく過激。面白くない。写真とか体験談、マンガが気持ち悪い	中学の頃はお姉さんだなあって感じだった
そこに載っているFだとか3Pだとかの体験談や投稿は本当だと思うか	絶対ウソだと思う。	全部本当だと思っている。気持ち悪いから嫌だけど、絶対こういう人はいると思う。別に根拠はない。きっといるだろう、ぐらい。
体験談にあるようなセックスを高校生でもやってると思う？	結構いると思う。1クラスで1人くらいかな、平均すると。裏でやってる人はいると思う。	いると思う。友達同士の話の中からもそういうことをしているという話を聞く。3Pというのは遊び感覚でやっちゃうみたい。やっぱバカ。頭悪い。そういうことしたい人はすればいい。
誰がこういう投稿をしてると思うか？	大人がやってる（書いてる？）と思う	コギャルっぽい子のイメージ。都立の子とか私立でも偏差値的にすごい下の学校の子。

(3) 女子高生ブームと性について～次に同年代の少女が直面しうる性にまつわる悩みや疑問を5例（テレクラ、援助交際、妊娠・性病、オーラル・セックス、デート・レイプ）提示し、「自分たちだったらその少女にどのようなアドヴァイスを与えるか」について、自由な意見交換を促した。そのディスカッションの中から、昨今の女子高生ブームやマスコミの援助交際報道についての意見、ならびに性に関する意識や知識を拾い出した。

女子高生ブームおよび性に関する知識について

	8月27日・A学園（高1）組	9月2日・B女子高校（高3）組
女子高生ブームをどう思う？	マスコミに出てくるような女子高生もいるけど、違う人もいる。でももうすたれてきている。最近は中学生がブーム？（自分たちが）高校生になった瞬間、中学生に移っちゃったよね。今はチャイドルの時代。チャイドルの方が安全だから。高校生は結構落ち着いている。	テレビがいってるほどコギャルは実際には多くない。目立つから騒がれるだけ。実際はすごい少なくて。 女子高生の価値は制服にあると思う。私服のときは声をかけてくる相手が違う（ホストクラブのホストに声をかけられる）。
援助交際が問題になっているけど、どう思う？	高校生がみんなやってるみたいにマスコミで取り上げられるのがすごくムカツク。変わったのは高校生じゃなくて、大人の方だと思う。TVでいつも援助交際してる女子高生のイ	やってる子は一部だけど、やってることがすごいから目立つだけ。うちら高1の頃はなかった。もうおじさんたちの間でなんか進んできてると思うんですよ。もうHは当たり前で

	ンタビューとかするけど、買う側の男の人って全然出てこないじゃん。	声をかける。大人がＴＶのニュース番組とか見て、影響されてるんじゃないか。 援助交際に誘うのはおじさん。40は絶対超えてて、お金持ってる。ホテルに行くなんて怖い。絶対できない。以前は（ご飯だけ食べてっていうのも）いなくもないと思うけど。
避妊について、どの程度知っているか	学校の講演に来た人が「私、性病持ってるからコンドームしたほうがいいよ」って言えば、男の人はつけるって言ってた。コンドームでも避妊率は80％とかでしょ。生理が来なかったらとっても心配になるし、セックスしない方がいい。ピルだって100％じゃないんでしょ、副作用は少ないって言うけど、成長に悪影響が出るんじゃない？	全然知らない。保健でやった程度。なんか薬とかありますよね。（基礎体温表とか？）あ、やったよね、それ。セックスしてる子たちも、知ってても別に気にしないでやっちゃってる。妊娠して産んだ子もいるけど、高３で学校やめて、もうバカとしかいいようがない。気をつけなかったこととかね。子供が可哀相だから。でも若い人だと相手がしてくれないんだよね。相手次第だと思う。
性にかんする情報源・相談相手は？	学校の性教育の授業。普通の雑誌に載っている情報も読むけど、ちょっと過激。学校の方はすごい正確。文部省から情報が入るんだもんね。親には相談しない。妊娠しちゃったらするしかないけど、それまでは学校の保健室の先生とか、部活の先輩とか。ドリアン助川のラジオとか。	高校では性教育は保健体育の授業で。でもほんのちょっとだけ。全然覚えてない。５０くらいの男の体育の先生で、いやだった。コンドームつける事とかは中学のときに男の子から聞いた。エイズのことは性教育とは別に学校で習った。「家庭の医学」みたいな本。相談するなら保健室の先生。若いから友達みたいな感じ。先生はたぶん親には言わないから、何でも話せる。

上記のインタビューの中で、自分あるいは友人が街中で大人の男性に声をかけられたという話が幾度も登場した。それについて以下にまとめる。

大人の男性に声をかけられた経験について

A学園（高1）組	B女子高校（高３）組
○　友達が駅で待ちあわせてしていて、テレクラに電話してきた子と間違えたおじさんに声をかけられた。「違う子でもいいから、今からお小遣いあげるからつきあわないか」と誘われた。 ○　大学生の人にこれから飲みに行かない？って。友達は、携帯の電話番号教えるから教えて、とか話していたけど、私はそういうのは絶対に嫌。 ○　知り合いが中年のおじさんにセンター街で誘われて、女の子３人でマクドに行ってカラオケして、それだけで１人１万円ずつもらった子がいる。それっていいね。（でも何にもしないで、知らない人おごってもらう上にお金もらうなんて抵抗感ないの？）自分たちにそれほどの価値があると思っているわけじゃないけど、私たちと会ってお話して、それで向こうがこれだけの価値のある時間が過ごせたと思っているならいいんじゃないですか？そうだよね、こっちからお金の交渉したわけじゃないし。 ○知りあいが歩いていたら、自転車に乗ったおじさんが来て、今はいてるストッキングここで脱いで売ってくれたら、３万円上げるって言われたって。本当に脱いで３万円もらったんだって。	○　昨日友達とコマ劇場歩いてたんですよ。そうしたら「今、ひま？」とかいって、「暇だけど私たちお金ないから何もできないんだ」とか言ったら、「いや、お金はあるから」とか言ってて、「じゃあ、とりあえずご飯でもおごってよ」って言ったら「それだけ？」とか言い出して。「私たちやりたくないから」って言ったら「あ、じゃいいや」ってどっか行っちゃった。 ○　友達は「お嬢ちゃん、キスして。2万円あげるから」とかいわれた事あるらしいけど、「いいです」って。 ○　ご飯だけ食べてお茶だけして５万もらったとか、話は聞いた事あります。ホテルに行って、やらなかったけど、途中までは。触らすくらいっていうか。 ○　私服だったら今度はホストさんに声かけられるんですよ。私たち５００円しか持ってない、って言ったら「じゃあ今度またくればいいから」とかいって、電話番号聞いて名刺とかくれて。一杯でもいいから飲みにくればって。１７歳だよとかいうと、「いいんだよ、年なんか。ごまかして入れば」とか言って。

＜考察＞ 以上の結果からいえることは、これらの女子高校生たちが雑誌に求めているのは、主にファッション、美容、芸能といった情報であり、それらと比較すると性にかんする情報はかなりプライオリティが低いということである。H系雑誌からの性情報摂取も、彼女たちにとっては中学生時代の一時期に限られた通過儀礼的な現象にすぎない。その一方で、彼女たちが日常的に成人男性からの性的誘惑にさらされている現実を考えると、少女たちの性行動の活発化に雑誌の性情報が果たした役割はさほど大きくはないと思われる。しかしながら、性情報のプライオリティが低いのは、必ずしも彼らがそれを必要としていないからではなく、現存の少女誌が実際に役に立つような性情報を提供していないためとも考えられる。そういう意味では、少女誌の性情報の過激さより、少女を取り巻く性的環境の変化に対応した情報提供がなされていないことが問題にされるべきである。

また、学校における性教育は非常に重要である。A学園ではリプロダクティブヘルスについての通年の授業があることから、避妊に関する知識も豊富で、B女子校の子たちが「避妊は相手次第」と言っているのに対し、コンドームを使っても失敗するかもしれないからセックスはしない、と対照的な答え方をしたことが印象的だ。また、性に関する問題が生じた時の相談相手として、両者に共通して挙げられたのは「学校の保健室の先生」である。96 年に文部省が実施した調査[13]で「保健室登校」が急増していることが明らかにされたが、「担任にも親にも言えないことを話せる相手」という、少女たちの養護教諭に寄せる信頼は想像以上に強いものだった。今後、リプロダクティブヘルス／ライツに関する情報の伝達経路として、保健体育の授業だけでなく、保健室という場の重要性に注目していく必要があるだろう。

考察および提言

本研究は少女向け雑誌における性情報が、少女たちの性行動の変化にどのように関与し、対応しているかをリプロダクティブヘルス／ライツの観点から考察することを目的としているが、少女雑誌の内容分析の時系列比較および国際比較で得られた結果を、グループ・インタビューから得られた情報に照らし合わせながら考えてみると、次のようなことが言える。

(1) マスメディア情報と少女の性行動の関係性について

近年「援助交際」が話題を呼び、高校3年女子の性体験率が男子のそれを上回るようになるなど、少女たちの性行動に急激な変化がみられるが、少女雑誌における過激な性情報は一部の雑誌（H系雑誌）においては 80 年代前半より存在しており、しかも一般総合誌においては近年性情報の割合が低下していることから、少女誌の情報が性行動の変化を引き起こすというような、直接的な因果関係を見出すことはできない。確かにH系雑誌においては質的な変化（ポルノ化）が見られるが、これは投稿を通じた読者主導型の変化であり、むしろ少女雑誌以外のメディア（アダルトコミック、アダルトビデオなど）を通して少女たちが男性中心的な性文化を摂取してきたことが示唆される。

また、インタビューからもわかるように、少女たちは一般的なマスコミに描かれる女子高生像に対して強い違和感を抱いており、しかも街中で成人男性が自分たちに声をかけてくるのは、そうしたメディアが流布したイメージの影響だろう、と分析している。実際に、大人向け雑誌記事の総索引を調べてみても、93 年以降の雑誌報道における女子高生イメージの商品化は著しく、それらの報道が成人男性の少女たちに対する態度に影響を及ぼしている可能性は否定できない。よってマスメディア情報と少女たちの性行動の変化の関係性を考えるのであれば、少女メディアの性情報の分析だけでなく、成人メディアにおける少女たちの性商品化とそれが成人男性に与える影響についての分析が必須である。「援助交際」「いまどきの女子高生」関連記事を掲載している大人向けメディアがどのように成人男性の頭の中にあったタブーを打ち壊したか、ということこそ分析されるべきではなかろうか。

今日のように性情報が社会全体に蔓延している状況にあっては、もはや有害図書規制などによって若年者のみを性情報から隔離しようとしても、大人たちが彼らを性商品として扱っている以上、彼らの性的関心をコントロールすることは実質的に不可能である。避妊法や性病について丁寧な情報提供をしていた 80 年代の少女誌が、有害図書論議で編集方針の変更を余儀なくさせられたことを考えると、若者の間の性感染症増加が懸念される中で、安易なメディア批判はかえって後ろ向きの結果をもたらす危険がある。むしろリプロダクティブヘルスの自己管理や性的な自己決定を可能にするような対抗情報を、少女たちに積極的に与えることで、「有害な性情報」に対する抵抗力を養うことが求められるが、既存の少女誌は、そうした少女をとりまく性的環境の変化に十分に対応しているとは言い難い。よって、少女向けメディアの性情報のあり方についての検討が必要である。

(2)少女向けの性情報のあり方について

現状の少女誌では性情報がH系雑誌に集中しており、一般総合誌ではほとんど取り上げられていない。しかも性情報の大半がセックスプレイの知識やポルノ的な読者投稿などに費やされ、避妊や性感染症についての情報は限られており、セクシャルライツにかんする情報はほとんどない。もしインタビューのサンプルが言うように、H系雑誌を読むのが中学時代の一時期に限られるのであれば、たとえ一部にリプロダクティブヘルスを取り上げた記事があったとしても、実際に性体験を持つようになった際には役に立たない可能性が高い。むしろ一般総合誌の方で、ファッションや美容にかんする情報とともに、リプロダクティブヘルス／ライツの視点から性を捉えた情報を提供していく方が有効であると思われる。

また、H系雑誌の読者投稿に見られるように、レイプや暴力的な性行為を肯定するような男性中心的な性の言説を、一部の少女たちが内面化していることは懸念すべき状況である。少女たちがエロティックな快感を求めること自体は卑しむべきことではないが、性的自己決定を脅かすような性の言説にのみ曝されているのでは、健全な性意識を育てることはできない。欧米においては、男性中心的な「ポルノグラフィ」に対してオルタナティブとなるような性の言説（女性を貶めることのない、搾取や暴力を伴わない、エロティックな言説）を「エロティカ」と呼んで区別しようとする運動が起きているが、こうした新たなエロスの可能性を少女たちに提案していくことも考えるべきであろう。

さらに、性情報を提供する際には、単に「コンドームをつけよう」「避妊をしよう」というセックスのための予備知識だけでなく、「コンドームはどこで手に入れたらいいか」「コンドームが破れた時はどうすればいいか」「避妊をせずにセックスして心配なときはどうすればいいか」「妊娠がわかったときはどうすればいいか」「中絶したくないけれど育てられない場合、養子縁組は可能か」など、実際に問題に直面している少女たちに、具体的な解決の方向性を示すような情報提供が必要である。書籍、ホームページなど自分で勉強できる情報源の紹介も必要だが、さらには個人的な相談ができるホットラインなどの紹介がぜひとも望まれる。そのためには、思春期の少女がアクセスしやすいような公共の相談機関の充実が早急に求められる。

メディア情報の発信者側には、スポンサーの要求や販売部数の確保という限定要因があるわけだが、日本の少女誌の読者参加型誌面作りは、ある意味では多様な意見を誌面に取り込む可能性を持った手法でもあることから、大人向けメディアに氾濫する性情報に対するカウンター情報の提供は工夫次第では十分可能であると思われる。今回検討した中では、『おちゃっぴー』を除く全ての日本の少女誌が男性編集長のもとで編集されていた。アメリカの少女誌の編集長は全員女性であり、かなり自覚的に読者の性的主体性を育成しようする姿勢が見られた。今後は日本においても、編集長レベルに同様な意識を持った女性が増えていくことが望まれる。

最後に、インタビューでは保健室の女性養護教諭に対して少女たちが強い信頼感を抱いていることがわかった。雑誌という枠組みを離れて考えるならば、保健室にパンフレットを置いたり、成績が評価されるような授業とは別に、保健室を使って少人数を対象にした

性に関するセミナーを行なったりすることも、有効な性情報提供の手段であると思われる。また、メディア・リテラシーの教育、すなわちメディア情報に対する批判的な視座を育成することによって、少女を記号化・商品化するような性情報に対する抵抗力を培っていくことも重要な方策である。特に近年の女子高生ブームと共に浮上してきたコギャル系雑誌は一見同じように見えながら、広告の種類、性の商品化に対する姿勢などに微妙な違いがある。こうした違いを見抜く力を若者たちに与えることが大人たちの使命であろう。

年表 少女をめぐるメディアの動き 1980～97

年	少女誌出版の流れ	少女をめぐるメディア状況	少女をめぐる社会状況
	●1980 年時点に既に存在した主な少女誌～「セブンティーン」(集英社)「プチセブン」(小学館)「MCSister」(婦人画報社)「ギャルズライフ」(主婦の友社)「マイバースディ」(実業之日本社)、「MIMI」(講談社)	(右下の数字は『大宅壮一文庫索引総目録』の掲載記事で「高校生」を見出し語とする記事のうち「女子高生」を取り上げた件数と「少女売春」を見出し語とした記事件数。連載は1件と数えた。)	
1980	「ポップティーン」創刊（富士見書房→飛鳥新社→角川春樹事務所） ＜月刊／生活情報誌＞	**「女子高生」記事8件、「少女売春」記事8件**	○竹の子族登場 ○松田聖子、たのきんトリオデビュー
1981	「ＯＬＩＶＥ」創刊（平凡出版→現在マガジンハウス）＜隔週／ファッション誌＞＊「ＰＯＰEYE」増刊 「ジュニアスタイル」休刊（鎌倉書房） ＜隔月／ファッション誌＞ 「ポップティーン」５月号より内容変更、性体験特集で部数伸ばす ●婦人誌の間で、ＳＥＸ関連の付録が増加	**「女子高生」記事2件、「少女売春」記事8件**	○ピンクレディー解散 ○「ウッソー、ホントー、カッワイー」が流行語に ○なめネコブーム
1982	「ＬＥＭＯＮ」創刊（学習研究社） ＜月刊／占い・恋愛・ファッション＞ 「エルティーン」創刊（近代映画社） ＜当初隔月刊、４号から月刊／生活情報誌＞ 「ジュニアスタイル」復刊 ●少女誌でもＳＥＸ記事の掲載が注目を集める。既存の「ギャルズライフ」もＳＥＸ記事を増やす。ハウツー情報が主体	○ラブコメ漫画人気とともにロリコンブームの到来 ○『積み木くずし』ベストセラーに ○独映画『クリスチーネ・Ｆ』(少女売春と麻薬がテーマ) 公開 ○邦画『セーラー服と機関銃』公開 **「女子高生」記事3件、「少女売春」記事9件**	○歌舞伎町ディスコで中3少女殺害
1983	「ＳＡＮ ＳＵＮ」創刊（学習研究社） ＜月刊／女子高生向けファッション誌＞ 「ギャルズライフ」(主婦の友社)、月刊から隔週刊に ＜隔週刊／生活情報誌＞ 「別冊マイバースディふれんど」創刊（実業之日本社）＜隔月刊／占い＞ コーススペシャル「Ｋｉｓｓ」創刊（学習研究社） 「キャロットギャルズ」創刊（平和出版） 「ＯＬＩＶＥ」ターゲットを高校生に下げる	○テレビ『積み木くずし』主演高部知子、「ニャンニャン」写真『フォーカス』掲載で問題に ○文部省が日本雑誌協会を招いて「青少年の健全育成に果たす出版事業の役割」を主題に懇談会開催 **「女子高生」記事1件、「少女売春」記事4件**	○女子大生ブーム ○中学生による浮浪者連続殺害事件 ○町田市の中学で教師が生徒を刺傷 ○東京ディズニーランドオープン

	●恋愛、ＳＥＸ、ファッションの婦人誌３本柱がローティーンまで降りてきている		
1984	「ジュニアスタイル」、隔月刊から月刊に 「ＰＯＴＡＴＯ」創刊（学習研究社）　＜月刊／芸能情報誌＞ 「私の個室」（主婦と生活社） 「ティーンの部屋」（学習研究社）など少女向けインテリア雑誌創刊相次ぐ 「クレープ」創刊（日の出出版）＜翌年より月刊化／ファッション・占い・娯楽＞ ●第二次ベビーブーム世代を見込んでティーンズ誌創刊ブーム	◎少女雑誌の過激なＳＥＸ記事を三塚議員が国会で問題に その結果、「Ｋｉｓｓ」（学習研究社）廃刊 「ギャルズライフ」は「ギャルズシティ」に改題及び内容変更、「ポップティーン」は自粛 ○三塚発言を受け、青少年向け有害図書をめぐり、図書規制立法の動きが高まるが、結局見送り **「女子高生」記事4件、「少女売春」記事2件**	○チェッカーズ人気 ○ＤＣブランドブーム
1985	「Ｃｏｏｋｉｅ」（シーズ）、「アーモンド」（新和出版社）などファッション・占い二本立ての雑誌創刊相次ぐ ●「ＬＥＭＯＮ」と同タイプの雑誌乱立するが苦戦	○「おニャン子クラブ」人気（『セーラー服を脱がさないで』ベストテン１位に） ○「東京女子高制服図鑑」発刊 第一次女子高生ブームの到来 **「女子高生」記事26件、「少女売春」記事14件**	○新風俗営業法施行 ○小泉今日子人気 ○「セーラーズ」キャラクター人気
1986	「ジュニアスタイル」、「Ｊｕｎｉｅ」に改題　＜月刊／ファッション誌＞ 「ＬＥＭＯＮ別冊」創刊（学習研究社）　＜隔月／占い読み物誌＞ 「おちゃっぴー／THE SUGAR 増刊」（考友社出版）　＜不定期／生活情報誌＞ 「デュエット」創刊（集英社）＜芸能・おしゃれ・投稿・占い＞ 「ピチレモン」創刊（学習研究社）　＜月刊／ローティーン向け、恋愛・占い＞	**「女子高生」記事12件、「少女売春」記事7件**	○テレクラを使った中高生売春が話題に（相次ぐ補導・摘発） ○中野区立中学でいじめ自殺 ○岡田有希子自殺、中高生の後追い自殺多発 ○少年隊人気
1987	「Ｃａｎｄｙ」創刊（講談社）＜月刊／おしゃれ・占い＞ 「ＹＵＭＭＹ」創刊（ワニマガジン社）　＜月刊／芸能・ファッション・ＳＥＸ＞ 「セブンティーン」（集英社）週刊から隔週刊へ　＜芸能・生活情報からファッション・占い中心へ＞ 「プチバースデイ」（実業之日本社）　＜月刊／「マイバースディ」の妹版＞ ●占い少女誌ブーム	**「女子高生」記事15件、「少女売春」記事11件**	○首都圏中高生に伝言ダイヤル爆発的人気→テレクラの低年齢化、売春利用増加 ○プリンセスプリンセス人気 ○中高生の間でアメカジブーム、センター街に中高生集中
1988	「クレープ」休刊 「ＷＩＮＫ　ＵＰ」創刊（ワニブックス）　＜月刊／芸能情報誌＞ 「プチセブン」（小学館）誌面刷新　芸能情報よりファッシ	**「女子高生」記事9件、「少女売春」記事7件**	○郊外テレクラで中学生売春が日常化 ○光Ｇｅｎｊｉ大人気

	ョン・恋愛など実用情報を提供		
1989	「ＬＥＭＯＮ別冊」休刊 「Ｐｅｅ　Ｗｅｅ」創刊（ソニー・マガジンズ）　＜月刊／生活情報誌＞ 「おちゃっぴー／THE SUGAR 増刊」を月刊化、「おちゃっぴー」に改題　＜性体験告白投稿で人気＞ 「ＣＵＴＩＥ」創刊（ＪＩＣＣ出版局→現在宝島社）　＜月刊／ファッション誌＞ 「Ｃａｎｄｙ」販売不振を理由に休刊 「Ｊｕｎｉｅ」（鎌倉書房）編集方針の転換　＜裁縫系雑誌から一般ファッション誌へ＞ ●少女誌ジャンル低迷する中で「おちゃっぴー」「ＣＵＴＩＥ」が好調	○少年少女向けコミック誌、単行本が問題化 **「女子高生」記事15件、「少女売春」記事10件**	○渋カジブーム
1990	●男性アイドル不振で芸能情報誌が低調な中、「プチセブン」「ＭＣＳｉｓｔｅｒ」「Ｊｕｎｉｅ」などファッション誌好調。特に、「プチセブン」渋カジ路線で部数伸ばす。Ｓｅｘ情報誌も好調で、「Ｙｕｍｍｙスペシャル」は袋とじのＳｅｘ情報で売れ行き伸ばす。	**「女子高生」記事9件、「少女売春」記事4件**	○ダイヤルＱ２ブームに
1991	「ＳＡＮ　ＳＵＮ」休刊 「パステルティーン」創刊（笠倉出版）＜隔月刊：性体験・イラスト投稿誌＞	○東京都、性コミックスを有害図書認定 ○「ＭＣＳｉｓｔｅｒ」のモデル読者に大人気 **「女子高生」記事10件、「少女売春」記事5件**	○渋谷のチーマーが問題化
1992	「パステルティーン」月刊化 ●ファッション誌好調続く、性体験投稿誌人気	○ドラマ『高校教師』放映 **「女子高生」記事8件、「少女売春」記事1件**	○ポケベル高校生に普及 ○ＳＭＡＰデビュー
1993	「ＺＩＰＰＥＲ」創刊（祥伝社）　＜月刊：ファッション誌＞（「ＢＯＯＮ」の少女版） ●第二次ベビーブーム世代が成人し、少女誌の急伸は頭打ちに	○マスコミに「コギャル」という言葉が登場 第二次女子高生ブームの到来 **「女子高生」記事34件、「少女売春」記事10件**	○デートクラブでの中高生バイトが増加し、ブルセラショップが社会問題に。「女子高生」がブランドとなり、お金になることに、女子中高生が気づく ○女子中高生たちの間にルーズソックス広まる ○「ヤンママ」が流行語に
1994	「fuu　セブンティーン」創刊（ダイアプレス）　＜月刊／恋愛・性・投稿＞ 「Ｊｕｎｉｅ」、鎌倉書房の倒産により休刊 「東京ストリートニュース！」創刊（学習研究社）　＜隔月刊／高校生活情報誌＞ ●ＳＭＡＰ、Ｋｉｎｋｉ　Ｋｉ	○テレビ各局テレクラ特集番組 **「女子高生」記事78件、「少女売春」記事24件**	○「援助交際」という言葉が中高生の間に広まる ○非行等問題行動対策関係省庁連絡会議にて、「ブルセラショップ」への対応が問題となる ○警視庁、都内デートクラブを摘発

	ｄｓ人気で芸能誌復活		
1995	「ＪＵＮＩＥ」、版元が鎌倉書房から扶桑社に変わって復刊<月刊／ファッション総合誌> 「ｅｇｇ」創刊（ミリオン出版）　<隔月刊／コギャル系ストリート雑誌> ●ティーンズ向けファッション誌ほとんど前年割、「エルティーン」などＨ系雑誌も伸び悩む	**「女子高生」記事38件、「少女売春」記事13件**	○テレホンクラブ、ツーショットダイヤル営業等が問題化 ○非行等問題行動対策関係省庁連絡会議にて、「女子少年の性的な問題行動」への対応が問題となる ○ＰＨＳ市場参入、携帯と共に中高生に急速に広まる
1996	「ＣＵＴＩＥ」、月刊から隔週刊へ（好調持続） 「Ｃａｗａｉｉ！」創刊（主婦の友）　<月刊／コギャル系ファッション誌> 「fuu　セブンティーン」「ＭＩＭＩ」「ＹＵＭＭＹ」休刊 ●中高生対象の主要誌いずれも部数減少、いわゆるコギャル系ストリート・ファッション誌が台頭	○テレビ朝日「朝まで生テレビ」で『女子高生と日本』放送 ○上記番組出演の女子高生と宮台真司が公開討論会 ○『ウォール・ストリートジャーナル』『ニューズウィーク』が援助交際を取り上げる	○プリクラ大流行 ○コギャル語が流行 ○東京都「買春処罰規定」導入を検討 ○安室奈美恵大人気、「アムラー」の登場 ○各地方自治体にテレクラ規制条例
1997	「ＳＮＡＰ×２」創刊（辰巳出版）　<不定期／コギャル系ストリート雑誌> 「おちゃっぴー」休刊 ●「Ｃｕｔｉｅ」好調継続で６０万部に達し、「セブンティーン」「プチセブン」落ち込む。		○東京都が「買春処罰規定」を導入 ○たまごっちブーム

文献

[1] 日本性教育協会「青少年の性に関する調査」昭和 62 年、平成 5 年

[2] 東京都性教育研究会「中・高生の性意識・性行動に関する調査」昭和 62 年、平成 2、5、8 年

[3] 池谷寿夫・山下崇「子供の性情報とその教育」『高知大学教育学部研究報告』(1995)

[4] 中澤智恵「『少女』誌にみる性情報」『性教育の今これから』(1995、金子書房)

[5] 深谷和子・三枝恵子・大塚礼子「女性雑誌と性情報—内容分析の手法を用いて—」『東京学芸大学紀要 第一部門教育科学』41 (1990)、pp.253-77

[6] 和田久美「"ストリート" 時代のティーンズ雑誌曼荼羅」『月刊アクロス』96 年 4 月号、pp.32－33

[7] 宮台真司『世紀末の作法』1997、pp.170－71

[8] Angela McRobbie, *Feminism and Youth Culture: From 'Jackie' to 'Just Seventeen'* (Houndmills and London: Macmillan, 1991)

[9] Melissa Milkie, "The Limits of Audience Power: Magazine Editors Account for the Persistence of Unrealistic Beauty Images Despite Criticism," 1996 Annual Meeting of American Sociological Association における報告

[10] 堂本暁子「メディアの性に関する報道が若年者にどのような影響を与えるか」『平成 8 年度厚生省心身障害研究～生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究』

[11] 岩室紳也「メディアの性に関する情報が若年者に与える影響－テレクラおよび性風俗に関する研究」1997

[12] 福富護「いわゆる『援助交際』に対する女子高校生の意識および背景要因の分析研究」1997
[13] 文部省「保健室利用状況調査」1996

ABSTRACT

The Media's Influence on the Reproductive Health of Young Girls

Yasuko Muramatsu, Rika Sakuma Sato, Fumie Saito, Aya Hirano

This study examines the relationship between information on sex in the media and teenage girls' sexual activity which appear to be increasing in recent years. In particular, it aims to reveal the problems of articles about sex in current teenage girls' magazines and seeks ways to provide information on sex that is more beneficial to young girls.

The content analysis of girls' magazines reveals that while very limited information about sex is offered in general interest magazines, such as *Seventeen* and *Puchisebun*, almost one-fourth of all pages are allocated for articles about sex in the so-called "H-kei (sexy) magazines," such as *Elleteen* and *Ochappi*. However, historical comparisons with similar magazines from the early 1980s show that there has not been much increase in the amount of information on sex within the past 15 years. It is difficult to establish a causal relationship between information on sex in teen magazines and the recent acceleration in sexual behavior of young girls. It should be noted, however, that in recent years the readers have become quite active in providing sexual discourses through letters and contributions to the magazines, and the contents of such contributions have become extremely pornographic.

Some of the so-called "kogyaru magazines," which began to emerge within the past several years, are produced by publishers which also publish adult pornographic magazines. They contain advertisements for "dengon daiyaru" (similar to telephone party lines) and seem to function as an intermediary for sexual encounters between adult males and teenage girls. According to group interviews with girls from private girls' high schools in Tokyo, it is no rare occurrence for young girls today to be sexually harassed by adult men on the street. We must pay more attention to the effect of media on adult men, who are beginning to see young girls as sexual objects.

Finally, the cross-cultural comparisons with American girls' magazines show that, although Japanese girls' magazines carry more articles concerning sex than American magazines, because of the emphasis on erotic pleasure, Japanese magazines lack information on reproductive health and sexual rights. In particular, pornographic discourses found among readers' contributions are problematic, because they tend to reproduce the male-centered view of sexuality which condones violence and female subjection. Thus, in order to counter the sexual commodification of young girls rampant within adult male media, the authors argue that it is crucial to give young girls information that will allow them to protect their reproductive health and enhance their awareness of sexual rights.

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約

近年活発化の動きを見せている思春期の少女たちの性行動と、彼女たちをターゲットとしているマスメディアにおける性情報との関係性を、リプロダクティブヘルスの視点から捉え直し、少女向け雑誌の内容分析を中心に、その国際比較および時系列比較、ならびにフォーカス・グループ・インタビューを通して、既存の雑誌における性情報の偏りを明らかにし、少女たちの身体的・精神的健康の向上に貢献するような情報発信の可能性を検討した。

分析の結果、性情報を売り物にする少女誌は 1980 年代初頭より存在しており、当時に比べて性情報の量や内容の露骨さに大きな変化は見られないことから、近年の少女たちの性行動の活発化が直接少女誌の性情報によってもたらされたとは考えにくいと結論された。但し、目につく質的な変化として、性情報の発信主体が読者自身に移ってきていること、さらに読者投稿の内容のポルノ化が進んでいることの 2 点が挙げられた。また、アメリカにおける少女誌との比較では、日本の少女誌の性情報は男性ポルノ誌のコピー的な情報に偏っており、性的自己決定権や避妊・性病予防などの自己身体管理にかかわる情報が大きく不足していることが明らかになった。

一方、グループ・インタビューでは、少女たちが日常的に成人男性による性的誘惑にさらされている実態が明らかになり、93 年以降の大人向けの雑誌における「女子高生」をキーワードとした記事件数の爆発的な増加を考えても、「女子高生」を商品化するメディアの情報が成人男性の少女たちに対する態度に及ぼす影響の方が懸念される。こうした社会環境の変化に対応するために、少女たちに積極的にリプロダクティブヘルス/ライツに関する対抗情報を与えて、巷に氾濫している性情報に対する批判的な視座を育成していくことを提言したい。